

「心によって見る」

サン＝テグジュペリの著した『星の王子さま』に登場するきつねは、「肝心なものは目に見えない」と教えてくれます。これは、人間の目にはぱっと見には見えない本質を見抜くことの大切さを言っています。とはいえ、もちろん、「目に見えるものは大切ではない」と言いたいものではありません。

例えば、神の救いには目に見えるものもあれば見えないものもあります。海を割ってその間を歩くような大きな救いもあれば、人間の内面に働く小さな救いもあります。派手な救いは確かに目立ちますが、それだけが救いの全てではありません。むしろ、見えない救いの方が深く、長く続くのではないのでしょうか。

イエスは、「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ」(マルコによる福音書 10:27)と教えられています。例えば、一人と向き合うことは人間にもできます。一方、全ての人と向き合うことなどではできません。まず、物理的に無理です。また、仮に出会えたとしても、人間の思いはいつも揺れ動きます。自分の気に入るか、気に入らないかで態度を変えてしまうでしょう。

しかし、神は違います。神は創られた世界の一つひとつに目をとめられます。何一つ、誰一人そのまなざしから漏れることはありません。それは、神から離れていこうとする人間でさえも同じです。

パウロは自らの信仰生活を振り返りながら、神の恵みに感謝します。『「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に來られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。』(テモテへの手紙一 1:15)という言葉からは、神の豊かな恵みに対する深い感謝が溢れ出ています。イエスのことを知らない時から、神はパウロのことを見つけ、支えてくださっていました。イエスの弟子たちを迫害している時ですら、神はパウロのことを見捨てられませんでした。迫害している当のイエス自身がパウロの目の前に立ち、パウロを立ち帰らせるのです(「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』使徒言行録 9:4-6)。その時、詩人が「彼はわたしに呼びかけるであろう／あなたはわたしの父／わたしの神、救いの岩、と。」(詩編 89:27)と歌うように、パウロの心はもう一度、神の方に向き直しました。人間が努力しても自分自身を変えることはなかなか難しいものです。しかし、神は一瞬にして心を入れ替える力を持っているとイエスは言われるのです。

「わたしは、その罪人の中で最たる者です。」とパウロが告白するように、端から見ればパウロは神から遠い存在と思われるはずですが、神を神ともせず、イエスの弟子たちを迫害していたのですから。そんなパウロが、何度「私は主に立ち帰りました」と告げても、見た目が変わるわけではありません。外から見ても違いがあるわけでもありません。

サムエルがエリアブに目をとめたのは、「彼こそ神の心に適う」と思えたからでしょう(「彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。」サムエル記上 16:6)。しかしそれは、見た目だけだと神は言われるのです(「しかし、主はサムエルに言われた。『容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。』」サムエル記上 16:7)。見目麗しいことは神の選びの基準とはなりません。確かに、見目麗しいことは神からたくさん恵みを与えられているような印象を与えます。大切なのは印象ではなくて現実なのです。

当たり前のことですが、内心の違いは外観では一瞬でわかりません。では、どうやって内心を知るのでしょう。それは、一つひとつの行動を見ていくしかありません。発言を聞いていくしかありません。その豊かな交わりの中で初めて、その人の内心がにじみ出てくるのを感じることができるようになります。それが、神の言われる「主は心によって見る」(サムエル記上 16:7)ということの本当の意味なのです。

人間の心は移ろいやすい。それでも、神が心によって物事を見られるように、私たちも心によって全ての物事と向き合いたいと願います。取るに足らない小さな私をも見つけてくださる神のまなざしに応えていくために、今日も私たちは目の前の一つひとつの存在と、出来事と向き合い続けるのです。

